The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ドーニャ・バルバラ」の意義と構成上の特徴
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	大阪外国語大学学報. 1963, 14, p. 185-196
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80234
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ドーニャ・バルバラ」の意義と構成上の特徴

吉　田　秀太郎

Sentido y forma de 《Doña Bárbara》

YOSHIDA-Hidetaro

SUMARIO

La desaparición de Doña Bárbara del hato de El Miedo no significa otra cosa que la derrota de la barbarie y el triunfo de Santos Luzardo que es el símbolo de la paz y orden. Su casamiento con Marisela quiere decir el advenimiento de una vida nueva de esperanza juvenil en los llanos venezolanos. Rómulo Gallegos proyecta su fe idealista en esta obra maestra engendrabora de obras, dignas de realizarse para toda Hispanoamérica. En este sentido, es el autor no sólamente el eseritor de su país natal, sino también el de toda América.

序

Rómulo Gallegos (1884—) が作家としての地位を確立したのは，1927年に出版された「ドーニャ・バルバラ」によってであり，長い作家生活の中では比較的初期の作品であるにも拘らず，今日に至るまで，「カンタクラロ」(1934) と「カナイマ」(1935) と共に彼の最も代表的な作品の一つとして親しまれ，ベネズエラの文学史上，古典的な存在となっている。この小説は，ただ単に，この国のリヤノス地帯に住む人々の生活の忠実な描写であるだけにとどまらず，そこに展開される様々な人間模様を通じて我々に訴える何物かをもっている。それは大自然と人間とのたたかいの歴史であり，文明に対する人間の飽くなき意欲と，同時に，大自然に帰りたい，郷愁との内的な争いになやむ人間像を浮き彫りにしている。作者は，彼の青春の理想を，この作品の中に実現しようとした。新らしい大陸に平和と，秩序と文明の光をもたらそうと彼は努める。祖国を愛し，大陸を愛する彼は，祖国の，大陸の真の姿を描きその問題を索り，それを解決しようとしている。この理想を，彼は，自分のペンに托するだけではなく，自から実行に移そうとしたのである。この点で彼は，典型的なイスパノアメリカの作家の一人に数えられるであろう。くり

返して言うと，「ドーニャ・バルバラ」は彼の青春の理想の化身である。本稿では，この小説のもつ意義と，その構成上の特徴について，その主なものを探ってみた。

〔註〕 ただ，この作品の呈示する諸問題の中，一部については，既に本学イスパニア語学科西語部会誌 Más y menos第21号において触れたので，省略する。

I　ドーニャ・バルバラの世界

ドーニャ・バルバラの素性は知れない。わかっているのは，ただ，彼女がまだうら若い15才の時，熱帯の密林を縫って流れるオリノコ河を上下する荷足船の中で，コックとして働いていたということだけである。しかし，彼女の生い立ちや，系譜を知り得たところで，一体，何になろう。彼女は所詮，この大河の中に生まれた川の娘(la hija de los ríos)なのである。はじめて咲いたアスドルーバルとのほのかな恋の花も，河を根城に悪事を働らく盗賊たちの暴力によって，無残にも散ってしまう。彼女は，男による恥辱の復讐に，執念の権化となる。あらゆる手段を用いてその目的を達成しようとする。彼女は，目的のためには手段を選ばない。そこには秩序も，規律も，善悪の判断もない。生来の美貌を利用してドーニャ・バルバラは平原の男たちを次々と堕落させ，彼らを巧みに操って自分の支配下に置くだけでなく，他人の地所を横取りして巨利を得，経済的にも地盤を築いて，平原に君臨する女ボスとなったのである。オリノコ河の奥地に拡がるアラウカ地方は，地理的な諸条件から，およそ近代文明からはかけ離れている。住民の間には奇習や，迷信などが未だに実行されているのである。ドーニャ・バルバラは土人たちから色々な妖術を学ぶ。オリノコの大森林に住んでいるといわれる悪神カマハイ・ミナレと通ずる術を覚えたり，男を堕落させるための催淫液プサーノを作るなどして，その魔女の様な力に，土地の人々から「ダニエーラ」と呼ばれている。(第1部第3章)。ダニエーラとは「妖術により他人に害を及ぼす人」という意味である。又，エル・ミエドの牧場では，彼女が「仲間」と称している神様を信じ，万事，この「仲間」にお伺いを立ててから決定する。祭壇には聖像，十字架，ワニの牙，火打石，土人の小屋からとってきた偶像などが置かれている。一方，彼女自身馬にまたがり，男たちと共に牛狩りに出かける勇敢さも持っている。彼女の心にあるものはおよそ野蛮的なものばかりである。そして，彼女をとり巻く一切のものが，これまた野蛮的なものばかりなのである。すなわち，彼女の許で働らく人足たちをはじめ，彼女と関係のあった男たちは，悪徳の度合において何れ劣らぬ者ばかりである。作者は，ドニャ・バルバラの世界を，想像し得るあらゆる野蛮性，残虐性に充ちたものにしている。クナビーチェの森で悪事を働らき，アラウカ地方に逃げ込んだモンドラゴーネス兄弟三人，妖術師と呼ばれるメルキァデス，ドーニャ・バルバラの

情夫を気取る，うすのろで，そのくせずるいバルビーノ・パィバ，流れ者のアメリカ人ミスター・デンジャー，地方の裁判所に働くペルナレーテなどなど。

バルビーノ・パイバは，元々，ドーニャ・バルバラの牧場に隣接する牧場アルタミーラの管理人として働いていたが，主人の長期不在をよいことにして牧場内の牛を連そ出し，隣の牧場に入れることによって，ドーニャ・バルバラに気に入られようとするにとどまらず，自分もひそかに，私腹を肥やそうとするしたたか者である。しかし，元来単純な男の仕業だけに，見抜かれてしまう。バルビーノ・パイバは，この小説の中でも，主人公を除いて，最も悪らつな人間として描かれている。「邪魔者は殺せ」，これが彼のモットーなのである。従って同じ牧場で働らく牧童たちからも嫌われるほどである。平原の土人たちの崇めているアヒレリートの魂を祭ってある祠からお賽銭を盗むのも彼なのである。

その点，メルギァデスは悪事は働らくけれども，悪い中にも良いところのある人間である。バルビノ・パイバが腹黒であるのに対し，メルキァですは純粋である。主人のためとあらば，どんな事でもやってのける忠誠心がこの男にはある。ただ，問題は，そのためには事の善悪を見極めないことである。彼は，バルビーノ・パイバから，主人を裏切る様な計画を聞かされ，彼もそれに加わるよう誘われたか，言下にことわっている。(第3部第1章)。嘗て彼は，サン・カミーロの山を根城に，追剝を働いていた。一見，東洋的な印象を与え，「ダッタン人が何時この土地にやってきたのかと思わせる様な」容貌の持ち主で，サントス・ルサルドがアルターミラへ向かう途中，荷足船の老舟頭から聞いた話にもあるように，「兎に角，あんたの近所の人で一番悪い奴を想像して，それにもう一つ何ぞ悪いことを足してくれたらわかりますぜ」といったタイプの人間である。

ドーニャ・バルバラの配下の悪党のグループにあって，メルキァデスと可成りよく似た人物がモンドラゴーネス兄弟である。バリーナス平原に生まれ，彼らもまた悪事を重ねた末，この土地に流れてきた。そして，ドーニャ・バルバラに対する恩義を人一倍感じている点でも似通っている。三人兄弟の中の一人「豹」は女主人の財産を守ろうとして潰走する野牛の群に蹂躙される。(第2部第4章)。無知にして一徹，これはモンドラゴーネス兄弟に見られる最も顕著な特徴であり，後進性のあらわれである点においてメルキァデスと共通している。

フアン・プリミートも奇僻の持ち主である。平原に住む男たちの間では悪党として誰一人知らぬ者はないが，ドーニャ・バルバラには，彼が，うすのろとしか思えない。それほど彼は猫かぶりなのである。迷信深く，レブリョーネスと呼ばれる鳥の群に餌をやっては，その日の吉凶を占なうのである。そのやり方と，ドーニャ・バルバラの妖術との間に非通に似通ったところがあ

る。彼女が誰かを殺そうと計るとき，彼は，餌皿に畜生の血を入れてやり，彼女が訴証事件をおこすときは酢と油を混ぜたものを鳥にのませるなどして，それを知るのである。(第2部第3章)。又，ドーニャ・バルバラの命令で，彼はサントス・ルサルドの背丈を測りに行く。これは，敵の背丈を測ると，その敵は敗北するという迷信からである。(第2部第3章)。彼の場合，ドーニャ・バルバラに心酔しているからとか，彼女に恩義を感じているからとかいうのではなく，うまく，自分の生活を保証するために，たとえ悪い事だとはわかっていても，それに対して目をつむる利己的な人間なのである。

野蛮性と残虐性とは表裏の関係にある。ドーニャ・バルバラの世界は，野蛮であると同時に，残虐である。彼女自身，彼女にとっては最初の相手たるロレンソ・バルケーロを完全に堕落させた後，アポリーナール大佐にその魔手を延ばし，やがてその目的が達せられるや，彼を，残酷にも，新しく建てる牧舎の人柱として，老馬と共に，予め掘っておいた穴の中に突き落してしまう。(第1部第13章)。又，彼女の情夫を気取っているバルビーノ・パイバも，牛泥棒稼業だけに飽き足りず，隣の牧場の人夫カルメリートとその弟ラファエルの持っていた羽根の束を奪おうとして，一人を殺して埋め，一人を河に投げこみ，ワニの餌食にさせている。(第3部第9章)。トルコ人で，変態性欲者，レプラを病み，バラタゴムの商いで金は持っているが，自分の淫らな心を満足させるだけではなく，自分の病気を他人に移すことによって喜びを感じるため，誘拐されたり売られたりした年頃の土人娘たちを囲っている図なども，彼女をとり巻く世界を一層野蛮なものにしている。更に，先刻一寸触れたが，土着民の間では色々な妖術がある。たとえば，目指す相手に悪意のこもった一瞥を加えるとそれだけで，不思議な恐ろしい病気を相手におこさせることが出来る「目師」や体の傷ついたケ所へ不思議の吐息を吹きかけてその病気をなおす「吹き師」，又，患者のいる方向を見ながら呪文を唱えるだけで，何リーグ離れていようが，その病気をなおすという祈祷師など枚挙にいとまのない程である。

しかし，残虐な野蛮性は，これらの人間たちにだけ存在するのではない。彼らの住んでいる大自然こそ，その測り知れない威力で，人間の力を無力化しようとしている。熱帯の大密林とそれに続く草原は人間をその虜にしている。従って人間は，言うなればこの大自然の犠牲となっているに過ぎないのである。ラ・バルケレーニャのチュスミータという湿地帯は，ヤルール族の伝説によれば，クナビーチェの男たちの暴力の犠牲となった土人たちが，彼らを呪いながら消えて行った土地であり，チュスシータという名も，酋長の娘の悶える霊魂のことだという。そして，そこへ水を飲みに来る仔牛たちは逃がれるすべもなく，泥の中に呑み込まれてしまう。ラ・アルタミーラのヂーズ場で働らいていた人夫の息子のヘスシートは，或る夜，虎に食われて死んでしま

う。(第3部第2章)。彼らを取り巻く大自然は，この様に苛酷なものなのである。冬が近づき，平原に雨期がやってくると，降り続く雨に堀割りも河も草原も一面，水びたしとなり，通る道もなくなってしまう。そして熱病が蔓延し，墓地の十字架が増えてゆく。(第２部第12章)。この様なことを考えるとき，平原のボスは，あながちドーニャ・バルバラだけではない。彼女は，色々な意味でこの平原を支配している幾分かのボスの一人に過ぎないのである。

すべてが野蛮に見えるこの平原に，ひよっこりと姿を現すのが，ミスター・デンジャーである。彼は，倒れた鳥や獣たちにたかって，その肉を食べる原野の掃除屋，はげたかのように，この土地に現われ，現地人たちの無知と無能さを利用して，彼らを搾取し，そして利益を収めている外国人であり，その名も示す通り，危険な人物なのである。ドーニャ・バルバラのアポリナール大佐の秘密を知っているのを種に，彼女の弱みにつけ込んで，種々の便宜をはかってもらい，巧みに土地や畜生たちをわがものにしてゆく。作者はこの人物を極めて非情に描写している。

これが，ドーニャ・バルバラを取り巻く世界である。

Ⅱ　サントス・ルサルドの世界

平原の女王，ドーニャ・バルバラは去って行かねばならない。彼女の蜃気楼ははかなくも消え，そして，「何時の日か真実はやってくる。平原には進歩が滲みわたり，野蛮性は敗退するだろう。恐らくわれわれはそれを見るに至るまいが，われわれの血潮は，それを見る者の感激の中に脈動することだろう」(第１部第12章) といった青年サストス・ルサルドの夢は，現実への第一歩を踏み出すことになる。平和と進歩，これは，サントスの理想である。ドーニャ・バルバラは言った。「私は自分というものに嫌気がさしてきたの。別の女に生まれかわって，別の人生を知りたい。まだ私は自分でも若いと思っているし，だから，はじめからやり直すことだって出来るわ」(第3部第4章)。彼女がこう言ったとき，これまでの彼女は消えてしまったのである。そして，別の女に生まれかわることは，そこに，新しい秩序の世界が生まれることである。アラウカの平原に悪名高かった彼女をして，この様な一大決心をさせたのは，言うまでもなくサントス・ルサルドである。荒され放題になっている自分の土地を守るために，都会での生活を諦めてサバンナに帰ってきたインテリ青年サントスは理想に燃えている。彼は，自分の生まれ故郷にくりひろげられている現実の余りにも無秩序で野蛮的なのに驚き，この土地に平和と進歩の光を放とうとする。その不屈の精神に，さしものドーニャ・バルバラも抗らい切れなかったのである。サントス・ルサルドとドーニャ・バルバラとの戦い，これが，この小説の中心的テーマである。彼女は，はじめ必死に彼の企てを妨害する。妖術師メルキァデスを派遣して，彼の行動を探らせた

り，モンドラゴーネス兄弟を用いて，境界線を次第に外へ外へと拡げたり，地方の裁判官ペルナレーテをまるめ込んで，地所の争いの時など，自分に有利な様に判決をしてもらったり，ニセの書類を作ったり，色仕掛けでサントスを誘惑したり，妖術を用いたりして，八方手を尽したが，結局，彼の揺がぬ正義感には勝てなかったのである。彼は，平原に秩序を樹立するための手はじめとして，境界線に柵を設けることを提案した。柵は，只単なる境界線となるだけではなく，野蛮性を締め出す柵であり，同時に，作者も言っているように，「大自然の作った曲線の中の直線，それは，無数の道があり，しかも，彷徨える希望の魂が正しい道を求めて遂に踏み迷ってから幾久しいこの大地に，唯一つの，そして未来に向かって真直ぐに走る道」(第1部第12章)なのである。彼は同時に，彼の叔父であり嘗てはドーニャ・バルバラの情夫だったロレンソ・バルケロの生ける屍に生きる喜びを教え，彼を勇気づける。アルコール中毒をおこして無気力に日々を過す彼も，その昔，まだ彼が春秋に富んでいた頃，サントス・ルサルド同様，この土地に戻ってきたのであった。都会で大学教育を受け，秀才とうたわれた彼であったが，バルケロ家とルサルド家との争いに巻きこまれて田舎に帰り，「そこに繰りひろげられていたドラマの大渦巻の中に真逆様に陥ちた」(第1部第10章)のだった。作者は，ロレソン・バルケロの姿に，大自然の持つ驚くべき力と，それに対する人間の力の微弱さをまざまざと見せてくれる。しかしサントスのはげましの甲斐もなく，彼は死ぬ，「沼が，わしを呑み込む！つかまえてくれ！わしを沈ませないでくれ！」(第3部第11章)と叫びながら。彼もまたこの「沼」の犠牲者なのである。

ドーニャ・バルバラとロレンソ・バルケロとの間に生まれた一人娘マリセラを，その粗野な，原始的な状態から，人間らしい生活へと導いた彼の努力も，この作品の第二の骨子をなすものである。そして，二人の間に芽生える「名もなき情熱」から更に固く結ばれるに至る過程は正に，文明と野蛮性とが，互に魅力を感じつつ融合する最も意義深いプロセスである。彼はこの平原に文明の光をもたらしにやって来た。しかし，真実，彼も元々平原の男であれば，この男性的な原野に魅力を感じない筈がない。ここに，彼の，人間としての，人間らしい一面がある。彼は結局，この二つの相反する力を首尾よく調和させた。マリセラとの結婚は，このサバンナに一つの新しい形の生命を生み出すことであり，そこに新しい秩序の生まれることを意味している。サントス・ルサルドは，平原に働らく人々に正義と，人間の尊厳性を教え，サバンナに降ってきた侵略者の陰謀を粉砕し，平和と愛に充ちた社会を作り出そうとしている。この様に考えるとき，彼の行為は，ドーニャ・バルバラで代表される野蛮性に対する啓蒙家としてのそれ以外ではない。チュスミータの森に住む野性の少女マリセラの顔を，冷やかな水で洗ってやり，彼女の眠れる魂を目ざめさせた時こそ，彼が，野性的なものに，文化の手を加えた第一歩であった。マリセーラ

が人間性に目覚め，美を発見したこと，これは，平原の若い力が，今やその理想に目覚めたことを示している。

作者は，意識的に，このサントスの世界を，善意に満ちたものとして描くことによって，ドーニャ・バルバラの世界との対比を一層効果的にしている。このことは，ラ・アルタミーラの牧場で働く人夫たちの描写においても言えることである。アントニオ・サンドバルは，礼儀正しい青年である。彼の家の者は代々この牧場で働いているが，秩序を重んじるのが家訓の様になっている。カルメリート・ロペスは両親が牛泥棒たちの犠牲となった男である。その復讐を願う彼ではあるが，そしてこの点では野蛮的ではあるが，この様な無秩序な世界が，一刻も早く過去のものとなる様にと，その希望を，都会の文化を身につけたサントスに託している。それ故にこそ，サントスの一見大人しい，都会的な感じの人間に見えることに対して歯がゆさを感じ失望する。が，彼等の青春のエネルギーの爆発である男性的な荒馬馴らしに，サントスがその並外れた勇敢さで以て馬を仕止めるとき，彼の真価を発見する。

パハローテニとホアン・パラシオは，どことなく人間味のある，誠に愛すべき男である。同僚のベナンシオやアントニオ・カルメリートなどとも仲がよく，快活な性格の持ち主である。話好きで音楽好き。話は大てい他人から聞いたことを自己流に上手にまとめて得意顔である。このために利用されるのが，同僚のマリア・ニエベスである。マリア・ニエベスも音楽好きで，牛狩りの後の宴の席では，この二人が妙技を披瀝する。彼は又，賭け事が好きだ。日々の生活は決して楽ではないのに，何とかして，やっている。資金に窮して，アニマ・サンタの祠の賽銭箱，代りのヒョッタンに手を出すこともあるが，バルビーノ・パイバの様な，根っからの悪人ではない。賭場からの帰りには，お礼にと，ローソクの一本も買ってくる。次の様な彼の言葉は，彼の性格を非常によく表わしている。「おれは御霊に向かって『仲間，もうおわかりと思うが，おいらは負けちまったんだ。また，いい時もあるさ。これ，少しだがお土産だぜ』といって，ローソクを一本燃してやったぜ，１ローチャもするやつをな。あの四枚の大金が，かりに司祭の手に入ったとしたところで，あのお燈明の明かるさは，せいぜい，こんなもんだろうと思うんだ」（第1部第7章）。パイローテのもつ，こうした性格は，ベネズエラの国民の大部分に共通したものではないだろうか。

以上が，サントス・ルサルドの世界である。作者は，ドーニャ・バルバラの世界に，サントス・ルサルドの世界を投ずることによって，前者の消滅を望み，後者の全平原に滲みわたることを希求したのである。

Ⅲ 「ドーニャ・バルバラ」の着想とベネズエラ

第一章と第二章で見たように，作者は，ドーニャ・バルバラの世界をあらゆる可能な範囲において野蛮にし，逆に，サントス・ルサルドの世界を大胆に理想化している。そしてドーニャ・バルバラの失踪と，サントス・ルサルドのマリセラとの結婚とで以て，草原に展開された一大ドラマを結んでいる。ドーニャ・バルバラの失踪は乃ち野蛮性の敗北であり，進歩の勝利である。サントス・ルサルドの夢は，実現した，と言えば早まっているとすれば，少なくとも実現への第一歩を見たのである。この青年サントスこそ，誰あろう，若き日のロムロ，ガリエーゴスなのである。彼は嘗て，友人とベネズエラの国内旅行を行なった際，この小説の舞台となっている，アラウカ地方に足を延ばしたことがあった。都会育ちの彼の眼に映った大自然の偉観と，そこに生活している同胞の，余りにもすべてにおいて都会とかけ離れている姿に，彼は考えさせられたのである。彼は，それが，単に地理的な条件によるものではなく，政治の貧困さに原因のあることを，そして又，国民の間にある自覚の問題であることを察知したのである。ベネズエラは，中南米諸国の中でも独立の精神の旺盛な国であったが，独立後の情勢は，必らずしも望ましい形ではなかった。独立当初は，政治の経験に乏しかったことから，無政府状態を招いて混乱し，更には，Pedro Arcaya 氏も指摘するように，この国民の血液の中にある権威に対する盲目的な服従心，嘗て，酋長に対してそうであったような服従心とが相俟って，この国に，いわゆるボス政治，(Caudillismo)，即ち独裁政治を許したのであった。従って，独立後のベネズエラの政治は，独裁政治の連続であった。独裁政治，必らずしも悪くないが，その弊害も決して少なくない。殊に，ベネズエラにおいては，その弊害は大きかった。「ドーニャ・バルバラ」が出版された頃の独裁者Juan Vicente Gómezに例をとってみると，彼は，1909年から1935年に至るまで26年間の長きにわたって，この国を牛耳ったのである。そして，その間，アメリコ，カストロも言っているように，「ベネズエラには，彼と彼の家族以上の盗賊はなかった」のである。彼は，ベネズエラを自分の所有物ででもあるかの様に濫用し，反対者を殺し，或いは投獄したのだった。今，彼の私生活についての一面を，Thomas Rourke 氏のレポートから，伺ってみよう。彼は服装においても，又日常の習慣においても極めて軍人的であった。服装について言うと，欧洲大戦前は，T.ルーズベルト大統領の心酔者で，衣服をはじめ，眼鏡まで同じ様なものを用い，顔の作りまでが北米大統領に似てきていたという。そして，大戦がはじまると，カイゼルを真似，軍服もドイツ式にし，口ひげを上向きによじった。生活について言うなら，それは軍隊生活そのままと言ってよかった。酒，タバコは喫まず，タラソナというインディアンを，召使い兼ボディーガードとし，彼に大佐の位を与え，彼の身のまわりのものは，靴から服に至るまで，全部彼に準備させ

た。彼を暗殺しようとする計画が嘗てあったが，その頃，この召使いが決って食べ物，水，薬など，大統領の口に入るるものは全部毒見をした。彼には，いわゆる家庭生活というものがなかった。夫人もおり，子供もいるのだが，彼らとは平常別居し，気が向いた時だけ彼らと会っていた。それでいて彼は，多数の女性と交わり，その中，側室を二人得て，彼女らに立派な生活をさせた。これは，自分の血の通った子供を名門の女性に生ませることによって，一族を増やし，自分の生命の不滅を願う彼の利己主義的な考えから出たものだった。しかし，この様に，女性と親交がありながらも，彼女らから影響を受けることは皆無だった。強いて彼が一応耳を貸したと言えるのは彼の母，エルメネヒルダと彼の姉の一人レヒナだけだった。丁度Cipriano Castro (1900—1909) が大統領のとき，Tello Mendoza という顧問格の人物をもっていた様に，ゴメスにはPimentelという男がいた。彼は金持ちで，教養があり，有能な男であり，ゴメスは互のために彼を充分に活用した。ピメンテルは田舎には大地所を持ち，都市には大きな建物をもっていた。そこでは日毎，夜毎にパーティが催され，それはぜいたくを極めるものであったらしい。集まる女性の数は多いが，それが，常に顔ぶれが違うのだった。ピメンテルの持っている招待者リストには，数多くの少女の名前が載っていた。彼は彼女らに衣服や金銭を与え，事実上，わがものにした。そして，ゴメス将軍を招いては，気に入った女性を彼の部屋に遣るのだった。ピメンテルは，この様にして，将軍ゴメスと親しくしていたので，彼を恐れず，好き勝手なことをした。以上，少し長くなったが，当時の独裁者の姿が，どの様なものであったかが，よくわかる筈である。

ロムロ，ガリェーゴスは，この様な時代に青春を迎えたのである。彼は，自分の国の政治家に義憤を感じたのである。彼は祖国を愛するが故に，この独裁政治の終結を祈った。その希求の結晶が，この作品となって現われたのである。従って，この小説の中には，当時の政治に対する痛烈な批判がある。それは，様々なエピソードの形となって，我々に迫ってくる。地方の裁判官ペルナレーテの存在は，明らかに，当時のCaudillismo に対する批判である。彼は，この裁判官のことをこう言っている。「彼は，この様な町の頭となるために必要なもの，つまり，あきれる程の無知と，親分的な気質，それと，軍隊での功労によって得た階級以外，全然持ち合わせていなかった」(第2部第1章)。

Ⅳ 構成上の特徴

この小説の構成上の特徴は次の三つの点において顕著である。即ち，1)或る特定の言葉乃至は名称に，二重の意味が与えられていること。2)或る比較される事柄が，この小説の展開する舞台

内での事象であること。3)文章全体として，記述的な傾向の大きいこと。ここでは1)と2)についてのみ述べることにする。

1)二重の意味が与えられていること。

これは，別の言い方をすれば，事物が象徴的に取扱かわれているということである。その端的な例が，ドーニャ・バルバラとサントス・ルサルドである。この小説の女主人公，ドーニャ・バルバラが，どの様な性格の女性であるかは，既に第一章で見た通りである。殺人，妖妬，迷信など，それらは，野蛮的なもの（lo bárbaro の代表的な存在である。作者は，この様な，典型的なタイプを作り上げたと同時に，この様な性格をもつ女性に敢えて，ドーニャ・バルバラ，即ち「野蛮な女」という固有名詞を与えたのである。ついでながら，この小説の題名は，はじめ「La Coronela」であった。彼は，この小説のモデルとなった或る実在の人物に因んでそうしたのであったが，後に至って，現在の様に改めたのである。このことは，この作品の全体的な構造上の調和という点から見て，効果があった様に思える。更に面白いのは，彼女の牧場の名前である。エル・ミエドとは，つまり「恐れ」の意であって，ドーニャ・バルバラの居る場所の名前としては誠にふさわしい。

これと，ほぼ同様なことが，サントス・ルサルドについても言い得る。ドーニャ・バルバラの最も恐れていた人物が，サントス・ルサルドである。彼の，アラウカ地方への到来によって，彼女の悪だくみは次々と粉砕されてしまうからである。彼女はたまらなくなってアラウカを去ってゆく。ちようど，日陰に棲息する虫けらが，直射日光を受けて逃げまどうように。その大陽とも言うべき存在のLuzardoのluzは光を意味している。そして，彼の正義感と，あらゆる誘惑に打ち克つその意志の力と，彼の心の奥底にある善意は，正に聖（Santo）のそれに似ている。従って，この作品の展開の上で極めて重要な役割を果す青年の名が，Santos Luzardoであるのも，故あってのことである。作者は更に，彼の場合にも，ドーニャ・バルバラの場合と同様，牧場に意味のある名称を与えている。アルタミーラとは即ちAltamiraで，altaは「高い」，miraは「見ること」又は「望楼」を意味している。つまり，Santos Luzardoのいるところは，「高い望楼」であり，それは，遠き未来の彼方までも見る彼に，ふさわしい名前である。

この様な見方をしてゆくと，「ブラマドールの驚き」と呼ばれているワニも．何物かを意味している。それは野蛮性を意味し，バルバラの権力を象徴している。鉄砲の弾でも絶対に貫らないとされていた伝説的なワニも，ルサルドの人足のパハローテとマリア・ニエベスによって最後の日を迎える。(第2部第6章)。「ブラマドールの驚き」の死は，ドーニャ・バルバラの権力の死である。「ブラマドールの驚き」がワニのことであれば，「サバンナの驚き」は，とりもなおさ

ず，ドーニャ・バルバラとメルキァデスの二人を指している。(第3部第1章)。種牛カボス・ネグロスが，メルキァデスの手に負えないことから，彼ら二人は，このサバンナに，「サバンナの驚き」を恐れない人のいることを知るのであるが，このカボス・ネグロスは結局，サントス・ルサルドのことなのである。作者は，この牛に，サントスの持つ性格を与えている。

ミスター・デンジャの存在も，この際見逃がしてはならない。既に見たような性格を帯びているアメリカ人に，そのものすばりの「危険氏」という名前を与えたところに，ここで言う象徴的な意義とは別の問題が生まれてくる。しかし，ここではそれには言及しないことにする。

柵が，この小説の中では特別な意味をもっていることも，既に見た通りである。

サバンナに見られる蜃気楼にも，もう一つの意義がある。それは，ロレンソ・バルケーロが嘗て描いていた夢，理想である。それは，蜃気楼の様に空しいものであった。

カルメリートが荒馬カティーラを捕えたことは，その事実だけでなく，平原に，ようやく文化の光が射し込んだことを意味している。更に，このカティーラとマリセラ，それに，サントス・ルサルドとマリセラの関係が，互に密接に繋がり合っていることがわかる。

カティーラが8の字のトンボ返りをすることは，マリセーラが我がままを言うことに通じ，はじめは荒っぽいが，次第に「絹の様になる」ことは，はじめ粗野だった彼女が，次第に女らしくなることを意味している。カティーラは，カルメリートが捕えたが，はじめて彼女に恋をしたのも彼だった。カティーラはサントスが欲しがった馬であり，マリセーラも，今はサントスが教育している。

2) 比　喩

小説全体から見ると，出てくる比喩の割合は少ない方であるけれども，作者は，この比喩の大部分を，この平原にあるか或いはそこに生じる現象に求めている点で，特異な効果を作品に与えている。今，上記の事項に該当するものを拾い挙げて行きたい。一応現われた順に挙げて行くことにする。

①ブルヘアドールの声は，丁度，平原の沼地の泥の様に柔らかく，ねっとりとしている (su voz blanda y pegajosa como el lodo de los tremedales de la llanura,) (P.11)

② ドーニャ・バルバラの心におこった急激な悲しみと失望を，作者は，土人たちのガバン狩りに燃やす火の，パッと消えたことにたとえている。(P.31)

③ ドーニャ・バルバラの心の中で沸騰するような官能性と，暗たんたる男性嫌悪の念とが融合するまでに相当な時間かかったことを，オリノコ河の黄色味がかった水と，グワィニァ河の黒っぽい水とが合流しても，しばらくその夫々の色を保っていることにたとえている。(P.33)

④ 大きな牛がしばらくこちらを向いていたが，やがて突然見えなくなってしまう。恰かも沼がそれを呑みこんだかの様に。(como si lo hubiera tragado el médano)，(P63)

⑤ 日が昇るのと，月が落ちるのと同時であった。椰子林は，夜明けの静けさに，聖なる林の如く震えていた。(P99)

⑥ 沼地の彼方に，竜巻が，丁度煙で出来た羽飾りの様に巻っていた。(P.104)

⑦ 非常によく似ているのたとえに，「同じ色の牝牛が互に似ているように」という。(P.123)

⑧ 落ち着きのない様をたとえて，「虫にさされている犬の様」だ。(P124) とムヒキータは，ペルナレーテ親方に叱られる。

⑨ 清潔にはなったが，まだ何処となく野性的なマリセラを評して，「パラグワタンの花の様に」あたりの空気に芳香を送っていると述べている。(P.133)

⑩ ファンプリミートが薄ぎたにく汚れた髪の毛をして，だらりと垂れた唇から，マリセーラに甘くささやきかける姿は，「丁度，黒い蜂の巣箱から甘い蜜が出るようである。」(P.142)

⑪ これまで，ドーニャ・バルバラの情夫たちは，全く彼女のものであったが，その様は，まるで「すべての畜生に烙印が押してある」のと同様である。(P.158)

⑫ 峠のいなご豆の樹は，蜂の羽音に交って，音色のよいハープの様に，ふるえている。(P.168)

⑬ 万事好転することを，野火のあとに芽生える新芽にたとえている。(P.178)

⑭ マリセラは，黙っていなくてもよいとなると，大声で歌い出す。丁度平原の鳥，パラウラータの様に。(P.197)

⑮ 「よかったら，何時間でもぶっ続けにしゃべっても結構ですよ，ちょうど，白く篠つく雨のようにね。」(P.199) 以上何れも，平原におこる現象であって，これらは，ほんの一例に過ぎない。

参 考 文 献

Anderson Imbert, E.: Historia de la literatura hispano-americana, Fondo de Cultura Económica, México, 1954

Alberto Sánchez, Luis: Escritores representativos de América I, II. Ed. Gredos, Madrid, 1957.

Idem.: Proceso y contenido de la novela hispanoamericana, Ed. Gredos, Madrid, 1957.

Arcaya, Pedro: Character of José Antonio Páez Venezuelan Caudillos in the Nineteenth Century. Hispanic American Historical Review, February 1935.

Henríquez Ureña, Max: Breve historia del modernismo. Fondo de Cultura Económica, México, 1954.

Henríquez Ureña, Pedro: Las corrientes literarias en la América Hispánica. F. de C. E, México, 1949.

La cultura y la literatura iberoamericana. University of California Press, 1957.

Obras completas de Rómulo Gallegos. Ed. Aguilar, 1958.